

テ形音韻現象の崩壊に関する議論

—宮崎県南部方言を対象として—

有元 光彦*

A Discussion on Decay of the *Te*-form Phonological Phenomenon
in the Southern Dialects of *Miyazaki* Prefecture

ARIMOTO Mitsuhiro*

(Received September 28, 2018)

1. はじめに¹

本稿の目的は、宮崎県南部方言を対象とし、各方言の動詞活用形の1つであるテ形に起こる形態音韻現象を記述することにある。記述対象とする宮崎県南部方言とは串間市、日南市方言である。また、形態音韻現象とは、有元光彦(2007a, 2007b)等で記述されている「テ形音韻現象」を指し、次のように定義されている。

(1) テ形音韻現象の定義：

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

ここで言う「動詞の種類」とは語幹末分節音(stem-final segment)の違いによるものであり、(2)のように大きく3種類に分類される。²さらに、子音語幹動詞は9種類、母音語幹動詞は2種類にそれぞれ下位分類する。

- (2) a. 子音語幹動詞：/kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>, /kak/<書く>, /kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>, /sin/<死ぬ>など
b. 母音語幹動詞：/mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける>など
c. 不規則語幹動詞：/i/~ /it/<行く>, /ki/<来る>, /s/<する>

テ形の語形成を記述する方法として、初期の生成音韻論を利用する。即ち、基底形である動詞語幹(2)とテ形接辞/te/が結合し、そこに様々な音韻ルールが適用されることによって、音声形が派生される、と考える。適用される音韻ルールは種々あるが、テ形音韻現象を司る中心的なルールは「e消去ルール」と仮定している。これは、語幹末分節音を参照して、テ形接辞/te/の/e/を消去するものであるが、方言による違いがあるため、個別的なルールと考える。それに対して、「逆行同化ルール」などは、すべての方言で適用されるため、普遍的なルールと考える(cf. 有元光彦 2007a:41)。従って、本稿ではe消去ルールを方言ごとに記述していくことになる。

2. 言語データについて

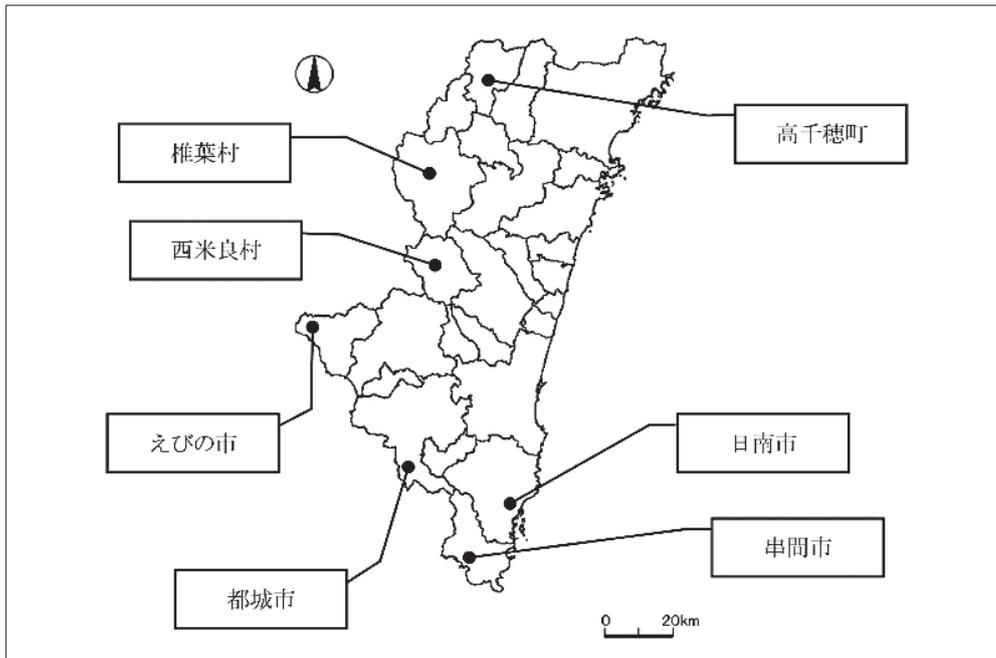
本稿で挙げる言語データは、2014年9月、2015年9月のフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、前述の5地点である。おおよその地理的な位置を【図1】に示す。

言語データは音声記号によって表記する。適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号?は少し違和感があることを、記号??はかなり不適格に近いことをそれぞれ表す。また、記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることを示す。音声形の直後の記号(古)は古い形である(使用しない)と、「(少)」は少しは聞いたことがある

* 山口大学国際総合科学部

¹本研究の一部は、科研費・基盤研究(C)のNo. 26370540, 18K00613によるものである。調査においては、各自治体の教育委員会、及び多くのインフォーマントの方々に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

²不規則動詞<行く>には、方言によって/itate/のような語幹を持っている場合がある。これは [itakkita] <行ってきた>の語幹として仮定されるが、他にも/itar/, /itas/のような語幹も考え得る。今後の課題である。

【図1】調査地点（地図は宮崎県全域）³

る（使用しない）と、「（若）」は若年層でよく聞かれる（使用しない）と、インフォーマントがそれぞれ回答していることを示す。また、記号-----は調査漏れであることを表す。

また、本稿では語幹末分節音が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が/k/である動詞、/kak/<書く>は「k語幹動詞」と呼ぶ。「i1, e1語幹動詞」は、語幹が1音節であるi, e語幹動詞を、「i2, e2語幹動詞」は、語幹が2音節以上のi, e語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス番号が付いていない場合は両方を含む）。

3. 分析

本節では、各方言のテ形音韻現象について、言語データを挙げつつ考察する。

3. 1. 串間市方言

本節では、串間市方言のテ形音韻現象について記述する。テ形の言語データを「A氏」「B氏」に分けて、【表1】に挙げる。

【表1】から共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声を抜き出すと、【表2】になる。

【表2】の分析に入る前に、母音語幹動詞のr語幹化（五段化）について述べる。有元光彦（2007a）等の先

行研究より、このr語幹化がe消去ルールに影響を及ぼすことが判明している。母音語幹動詞の否定形と過去形を【表3】に挙げる。

【表3】から、A氏ではi1, i2, e1語幹動詞が、B氏ではi1, e1語幹動詞がそれぞれr語幹化していることが分かる。

そのうえで【表2】を見ると、A氏とB氏では全く様相が異なることが分かる。A氏では基本的に[te], [de]が現れているため、「非テ形現象方言（タイプN1方言）」である（cf. 有元光彦 2018）。一方、B氏では基本的に[ɸi], [ɸi]が現れているため、「非テ形現象方言（タイプN2方言）」である。

これらの方言タイプは、e消去ルールの適用環境の違いに注目した分類である。e消去ルールは（3）、あるいは（4）のように規定される。（4）の「X^c」は「Xの補集合」を表す。

（3） e消去ルール：語幹末分節音がXでない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合、テ形接辞/te/の/e/を消去せよ。

（4） e消去ルール： $e \rightarrow \phi / X^c] t _ _]$

ここでは、この適用環境の1つであるXに方言差があると考えている。⁴ 両氏の場合、（3）あるいは（4）

³ 【図1】は、国土交通省国土政策局「国土数値情報（行政区画データ）」（<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/>）をもとに、筆者が地理情報分析支援システムMANDARA 10（<http://ktgis.net/mandara/>）を使用して編集・加工したものである。

⁴ 方言差を音韻ルールのどこに見出すかという問題については、議論の余地がある。本稿の別案として、音便と関連させる考え方もあるが、その場合、どのような音韻ルールを、どのタイミングで適用するか等の問題を合わせて考慮する必要がある。今後の課題である。

【表 1】串間市方言の動詞テ形

語幹	A氏	B氏	意味
kaw<買う>	ko:tekita *kokkita	kokkita ko:ɸjikita	買った
tob<飛ぶ>	tondekita toŋkita *tokkita	*tokkita *toŋkita tonɸjikita tsu:ɸjikita(古)	飛んできた
asob<遊ぶ>	-----	*asoŋkita *asuŋkita asu:ɸjikita	遊んできた
jom<読む>	jondekita joŋkita	*joŋkita jonɸjikita ju:ɸjikita	読んできた
ogam<拝む>	ogandekita ogaŋkita	-----	拝んできた
kas<貸す>	kaɸitekita *kakkita *kekkita *kasekkita	*kekkita *kasekkita keɸjikita	貸してきた
kak<書く>	kaitekita *kakkita *kekkita	*kekkita keɸjikita	書んできた
kog<漕ぐ>	koidekita *kokkita *kekkita	*kokkita *kekkita koɸjikita	漕いできた
ojog<泳ぐ>	ojoidekita ojokkita(少) *oekkita	ojuɸjikita	泳いできた
tor<取る>	tottekita *tokkita	toɸjikita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita *kakkita	kaɸjikita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ɸindekure *ɸiŋkure	*keɸiŋkure keɸiŋɸikureŋka	死んでくれ
mi<見る>	mittekita *mikkita *mittekita	mittekita *mikkita miɸjikita	見てきた
oki<起きる>	okittekita *okikkita *okittekita	*okekkita okeɸjikita	起きてきた
de<出る>	dettekita dekkita(少) *dettekita	%dekkita deɸjikita	出てきた
uke<受ける>	ukettekita ukekkita *ukettekita	%ukekkita ukeɸjikita	受けてきた
i~it~itate<行く>	ittekita *itekita *ikkita itakkita	itekita *ikkita %itakkita iɸjikita	行ってきた
ki<来る>	kitekureŋka kikkureŋka(少)	kitekuri: *kikkuri: kiɸfikuri: kiɸjekuri:(古)	来てくれ
s<する>	ɸitekita *ɸikkita *sekkita	ɸitekita *ɸikkita *sekkita ɸiɸfikita	してきた

【表2】串間市方言における「テ」「デ」に相当する部分の音声

語幹末分節音	A氏	B氏
w	te	Q, tʃi
b	de, N	ɕi
m	de, N	ɕi
s	te	tʃi
k	te	tʃi
g	de, (Q)	ɕi
r	te	tʃi
t	te	tʃi
n	de	ɕi
i ₁	te	te, tʃi
i ₂	te	tʃi
e ₁	te, (Q)	Q, tʃi
e ₂	te, Q	Q, tʃi
it	te, itaQ	te, itaQ, tʃi
ki	te	te, tʃi
s/sc	te	te, tʃi

【表3】串間市方言の母音語幹動詞の否定形・過去形

	A氏		B氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min	mita	*min	mita
	miran	*mitta	miran	*mitta
起きる	*okin	okita	oken	oketa
	okiran	*okitta	okeran (若)	*oketta
出る	*den	deta	*den	deta
	deran	*detta	deran	*detta
受ける	uken	uketa	uken	uketa
	*ukeran	uketta	*ukeran	*uketta

が適用されると考えるなら、いずれも $X = \emptyset$ (ゼロ) である。この場合、このルールはいわばvacuousに適用されることになる。もちろん、このルールは適用されないと仮定することもできる。なお、テ形接辞は、A氏では /te/, B氏では /ti/ となっている。e 消去ルールが適用された (または適用されなかった) 後は、「有声性順行同化ルール」が適用される (cf. 有元光彦 2007a:46)。これによって、例えばA氏の場合、/te/ が [te] または [de] で現れる。

しかし、別の音声も両氏に見られる。A氏では、b, m 語幹動詞で撥音が現れ、g, e 語幹動詞でわずかに促音が現れる。後者はインフォーマントが使用しないことから、前者だけに注目すると、この分布は2つの方言タイプの可能性を持っている。一つは「真性テ形現象方言

(タイプTAまたはTC方言)」, もう一つは「全体性テ形現象方言 (タイプW2方言)」である。いずれの場合であっても、適用環境Xは (5) のようになる。⁵

(5) A氏: $X = \{ [+cor], [+back], [-cons], +lab \}$

(5) を考慮すると、いずれの方言タイプであっても、体系性が崩壊しつつあることには変わりがないと考えられる。ただ、第4節で検討するように、九州南部の諸方言は「全体性テ形現象方言 (タイプW1方言)」であるため (cf. 有元光彦 2015), 「真性テ形現象方言 (タイプTAまたはTC方言)」とするよりは、「全体性テ形現象方言 (タイプW2方言)」の崩壊型であると考え方が妥当であろう。

⁵ 弁別素性の略称は、[cor]=coronal, [cons]=consonantal, [lab]=labial, [cont]=continuant, [nas]=nasalである。

以上より、串間市方言の方言タイプは次のようになる。

- (6) a.A氏：①非テ形現象方言（タイプN1方言）
 ②全体性テ形現象方言（タイプW2方言）
 (X=[[+cor], [+back], [-cons, +lab]])
 b.B氏：非テ形現象方言（タイプN2方言）

3. 2. 日南市方言

本節では、日南市方言のテ形音韻現象について記述する。テ形の言語データを「C氏」「D氏」に分けて、【表4】に挙げる。

【表4】から共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声抜き出すと、【表5】になる。

【表4】日南市方言の動詞テ形

語幹	A氏	B氏	意味
kaw<買う>	kokkita ko:ɸikita	kokkita ko:ɸikita	買った
tob<飛ぶ>	toɲkita &tokkita &totɸikita tonɸikita	tondekita tokkita *toɲkita	飛んできた
jom<読む>	?joɲkita jonɸikita	joɲkita	読んできた
kas<貸す>	*kakkita *kekkita kaɸikkita kaɸiɸikita	kaɸitekita *kakkita *kekkita	貸してきた
kak<書く>	*kakkita *kekkita kaɸiɸikita	kekkita	書いてきた
kog<漕ぐ>	*kokkita *kekkita koiɸikita	----	漕いできた
ojog<泳ぐ>	*ojokkita *oekkita ojoiɸikita	ojoiɸitekita ojoiɸekita oe:dekuru *oekkita	泳いできた
tor<取る>	tokkita totɸikita	tokkita	取ってきた
jar<やる>	jakkita jattɸikita	----	やってきた
kat<勝つ>	*kakkita kattɸikita	kakkita	勝ってきた
sin<死ぬ>	*ɸiɲkure ɸiɸiɸikita	ɸiɸitekure ɸiɸiɸikure *ɸiɲkure	死んでくれ
mi<見る>	mikkita miɸiɸikita	mikkita	見てきた
oki<起きる>	*okikkita okiɸiɸikita	okitekita *okikkita	起きてきた
de<出る>	dekkita deɸiɸikita	dekkita dekita	出てきた
uke<受ける>	ukekkita ukeɸiɸikita	ukekkita	受けてきた
i~it~itate<行く>	ikkita *itakkita itɸiɸikita	ittekita itekita *ikkita	行ってきた
ki<来る>	*ki?mi: kiɸiɸimi:	kitekure *kikkure	来てみろ 来てくれ
s<する>	ɸikkita ?ɸiɸiɸikita	ɸikkita ɸikita *sekkita	してきた

【表5】日南市方言における「テ」「デ」に相当する部分の音声

語幹末分節音	A氏	B氏
w	Q, ʧi	Q, ʧi
b	N, ʧi	de, Q
m	?N, ʧi	N
s	ʧi	te
k	ʧi	Q
g	ʧi	de, ɬe
r	Q, ʧi	Q
t	Q, ʧi	Q
n	ʧi	de, ʧi
i ₁	Q, ʧi	Q
i ₂	ʧi	te
e ₁	Q, ʧi	Q
e ₂	Q, ʧi	Q
it	Q, ʧi	te
ki	ʧi	te
s/se	Q, ?ʧi	Q

また、3. 1. と同様に、母音語幹動詞の語幹末分節音を設定するために、否定形・過去形を【表6】に挙げる。

【表6】日南市方言の母音語幹動詞の否定形・過去形

	A氏		B氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min	mita	*min	mita
	miran	*mitta	miran	*mitta
起きる	%okin	okita	okin	okita
	okiran	*okitta	oken	*okitta
			*okiran	
出る	den	deta	*den	deta
	deran	*detta	deran	*detta
受ける	uken	uketa	uken	uketa
	*ukeran	*uketta	*ukeran	*uketta

【表6】から、i1, e1語幹動詞はr語幹化しているが、i2, e2語幹動詞はr語幹化していないことが分かる。

そのうえで【表5】を見ると、まずA氏では全体的に[ʧi], [ʧi]が現れていること、そしてr, t, n語幹動詞にも[ʧi], [ʧi]が現れていることから、「非テ形現象方言(タイプN2方言)」であると考えられる(擬似テ形現象方言ではない)。しかし、w, b, r, t語幹動詞では促音・撥音が現れることから、「全体性テ形現象方言(タイプW2方言)」のようにも見える。ただ、典型的な全体性テ形現象方言と比較すると、次のようにXに大きな違いがある。

- (7) a. 典型的な全体性テ形現象方言: X=∅
 b. A氏: X={ [+cor, +cont], [+nas], [+back] }

(7b) では、全体性テ形現象方言が崩壊しつつあるような様相を呈している。

一方、B氏でも促音・撥音が現れていることから、

「全体性テ形現象方言(タイプW1方言)」と考えられるが、s, g, n語幹動詞ではイレギュラーな振る舞いをしている([te], [de]が現れている)。従って、B氏のe消去ルールの適用環境はX={ [+cor, +cont], [+nas, -lab], [+back, +voice] }としておくしかないだろう。また、B氏では、w, g, n語幹動詞に[ʧi], [ɬe], [ʧi]が現れている。これは「非テ形現象方言(タイプN2方言)」の名残りとも考えられるが、体系的ではない。

以上より、日南市方言のテ形音韻現象の方言タイプをまとめると、次のようになる。

- (8) a. A氏: ①非テ形現象方言(タイプN2方言)
 ②全体性テ形現象方言(タイプW2方言)
 (X={ [+cor, +cont], [+nas], [+back] })
 b. B氏: 全体性テ形現象方言(タイプW1方言)
 (X={ [+cor, +cont], [+nas, -lab], [+back, +voice] })

(9) から分かるように、まず日南市方言のタイプ W1方言は、鹿児島県に広く分布する方言タイプと同じであり、方言圏を成している。一方、串間市、日南市両方言のタイプ N1, N2方言は、その方言圏の影響を受けていない。同じ方言タイプが児湯郡西米良村、東臼杵郡椎葉村方言にも見られることから、宮崎県の南部・中西部に特有な方言タイプであろう (cf. 有元光彦 2018)。問題は次に示す3つの方言タイプである。

(X={ [+cor, +cont],
[+nas], [+back] })
[B] 全体性テ形現象方言
(タイプ W1 方言)
(X={ [+cor, +cont],
[+nas, -lab], [+back,
+voice] })

- (10) a. 串間市方言： [A] 全体性テ形現象方言
(タイプ W2 方言)
(X={ [+cor], [+back],
[-cons, +lab] })
- b. 日南市方言： [A] 全体性テ形現象方言
(タイプ W2 方言)

(10) の3つの方言タイプは、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声の分布、及び方言タイプの地理的分布から、いずれも全体性テ形現象方言であることは間違いないが、いずれも体系的崩壊がかなり進行しているようである。典型的な全体性テ形現象方言の場合、X = φ であることから、【図3】のような通時的変化が仮定できる。

w	b	m				w	b	m				w	b	m				w	b	m
s	k	g		→		s	k	g		→		s	k	g		→		s	k	g
r	t	n				r	t	n				r	t	n				r	t	n
典型						日南[B]						日南[A]						串間[A]		

【図3】テ形音韻現象の通時的変化

【図3】は、五段動詞の9種の語幹末分節音のうち、どれに全体性テ形現象方言の名残りである促音・撥音が現れているかという点を、(10)の3方言について示したものである。左端には、典型的な全体性テ形現象方言の場合を挙げている。典型的な場合では、すべての種類の動詞において促音・撥音が現れる。しかし、(10)の3方言においては、【図3】のようにその分布が次第に崩れていき、一部の動詞にしか促音・撥音が現れないようになる。

また、【図3】を見る限りでは、その崩壊はある程度法則性があるようである。即ち、最も早く崩壊しているのは中段の〈s, k, g系列〉の部分である。次に早いのは〈r, t, n系列〉、そして最後まで保持されるのは〈w, b, m系列〉であろう。弁別素性で表すと、[-lab, -cor]→[+cor]→[+lab]の順に崩壊が進行するようである。また、テ形音韻現象が音便現象と関連があるという考え方では、イ音便→促音便→撥音便の順になると記述できるかもしれない。

いずれの記述も可能ではあるが、それが何を意味しているのかという問題については、今後の課題である。

5. おわりに

本稿では、宮崎県南部の串間市方言、日南市方言を対

象として、テ形音韻現象を記述するとともに、そこに起こっている全体性テ形現象方言の崩壊について考察した。その結果、両方言とも基本的には非テ形現象方言であることが判明した。これは、地理的に隣接する鹿児島県南部方言の方言タイプとは異なるものであった。また、全体性テ形現象方言の崩壊について、非常にシンプルではあるが、一つの仮説を提示することができた。以上により、両方言は、独特な方言タイプを持っている一方で、近隣の優勢な方言タイプの名残も見られる、ということが明らかになった。

なお、本稿での考察を経て、多くの理論的な問題も浮かび上がってきている。次の2点である。

- (11) a. 方言システムの崩壊とは何か？
b. 崩壊プロセスをどのように記述するか？

(11a) は、どういう状態になれば、体系的崩壊と言えるのかという、線引きの問題である。テ形音韻現象が、例えば r, t, n 語幹動詞全体に見られなくなるのであれば、[+cor] の分節音が崩壊したと言えるのだろうが、r 語幹動詞だけに見られなくなった場合、自然な弁別素性の集合で /r/ を記述することは難しくなる。即ち、崩壊は必ずしも体系的には起こらない可能性がある。どの

ような場合に体系的な崩壊で、どのような場合に個別の崩壊なのか、その境界をどのように決めるのか、多くの問題が残る。

また、(11b)は記述方法の問題である。現時点では、e消去ルールの適用環境Xは「e消去ルールが適用されない」集合である。しかし、それを「e消去ルールが適用される」集合で設定した方が簡潔になるのではないだろうか。例えば、串間市方言の場合、(10a)は $X=\{w, s, k, g, r, t, n\}$ を表しているが、e消去ルールの適用環境は X^c である。それならば、適用環境を「 X^c のとき」としてXを指定するのではなく、直接 X^c を指定してやれば、 $X^c=\{b, m\}=[+cons, +lab]$ というように非常に自然な素性指定ができることになる。なぜこのような素性指定をしないのだろうか。それは、真性テ形現象方言を記述する場合、適用環境を「 X^c のとき」とした方が、Xがより自然な素性指定になる、という方法論上の理由があるからである。しかし、真性テ形現象方言を簡潔に記述したいがために、全体性テ形現象方言の記述が複雑になったのでは、理論全体として根本的な問題が潜んでいる可能性が高い。 X^c とXはまったく逆のものであるが、そのいずれかを使用することに、どのような意味があるのか、十分な検討が必要である。

真性テ形現象方言がどのように崩壊していくかというプロセスの理論化については、有元光彦(2015)で扱ったが、そこでは全体性テ形現象方言の崩壊については予測していなかった。真性テ形現象方言が崩壊して全体性テ形現象方言になることは議論したが、さらにその全体性テ形現象方言が崩壊することは考えていなかった。しかし、どの方言タイプであっても言語内的に崩壊することがあり得るということを示すことができた点では、本稿には重要な意義があったと言える。現時点までの研究では、イレギュラーな振る舞いをしばしば保留してきたが、再度検討してみる必要があるだろう。

【参考文献】

有元光彦(2007a)『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』ひつじ書房。
 有元光彦(2007b)『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象—』平成16～18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(No.16520281)研究成果報告書。
 有元光彦(2010)『テ形音韻現象における構成的アプローチの試み』平成19～21年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」

(No.19652941)研究成果報告書。
 有元光彦(2011)「熊本県本土南部・鹿児島県本土北西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢(山口大学教育学部)』第60巻・第1部, pp.25-38。
 有元光彦(2013)「タイプPD”’, PG方言の発見—熊本県北東部・大分県中西部方言の動詞テ形における形態音韻現象—」『研究論叢(山口大学教育学部)』第62巻・第1部, pp.37-55。
 有元光彦(2014)『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的・構成的研究』平成23～25年度科学研究費・基盤研究(C)「九州方言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究」(No.23520554)研究成果報告書, pp.162。
 有元光彦(2015)「タイプW1方言と方言崩壊—九州南部方言における動詞テ形音韻現象—」『九州大学言語学論集』第35号(言語学研究室創立50周年記念号), pp.299-328。
 有元光彦(2017)「鹿児島県本土西部・南部方言におけるテ形音韻現象の記述」『研究論叢(山口大学教育学部)』第66巻・第1部, pp.15-29。
 有元光彦(2018)『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的研究』平成26～29年度科学研究費・基盤研究(C)「九州方言音韻現象の方言崩壊ヒストリーに基づく方言形成シナリオの構築」(No.26370540)研究成果報告書。
 Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.
 岩本実(1983)「宮崎県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』飯豊毅一ほか編 国書刊行会 pp.267-293。
 Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.
 九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房。
 Mohanan, K.P. (1986) *The Theory of Lexical Phonology*, D. Reidel Publishing Company.
 屋名池誠(2009)「〔書評〕有元光彦著『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』」『日本語の研究』第5巻3号 pp.132-138。